



**Data**

監督・脚本: エマニュエル・フィンケル  
 原作: マルグリット・デュラス『苦悩』(河出書房新社刊)  
 出演: メラニー・ティエリー/ブノワ・マジメル/バンジャマン・ビオレ/シュラム・アダール/グレゴワール・ルブラン/ランゲ/エマニュエル・ブルデュー

## 👁️👁️ みどころ

ナチスドイツ占領下のパリ。ゲシュタポに連行された夫を待つレジスタンスの妻。本作はフランスの女流作家マルグリット・デュラス自身の自叙伝的小説『苦悩』の映画化だが、夫の情報を得るためなら、ゲシュタポの男とだって…。

女優は魅力的だが、モノローグの多用は如何なもの・・・？私はそう思うし、妻の“苦悩”にも納得・共感できないが、さてあなたは・・・？

華僑の青年との性愛を描いた映画『愛人 ラマン』(92年)の原作をデュラスが書いたのは1984年、70歳の時というからすごいし、これも自叙伝的両説というから恐れ入る。ちなみに、私は渡辺淳一の性愛小説(?)が大好きだが、デュラスははるかその先を・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■フランスの女流作家マルグリット・デュラスに注目！■□■

私は映画『愛人 ラマン』(92年)をよく知っていたが、その原作者がフランス人の女流作家マルグリット・デュラスだということを知らなかった。また、その原作は、何と彼女が1984年、つまり彼女が70歳の時に出版し、ゴンクール賞を受賞した小説『愛人 ラマン』だということも知らなかった。さらに、この小説は、1914年にフランス領インドシナ現ベトナムのサイゴンに生まれ、1932年にフランスに帰国した後、本作のような数奇な人生を生きた後に、自分自身がインドシナに住んでいたときに知り合った華僑の青年とのはじめての性愛体験を描いた自叙伝的小説だということも知らなかった。

しかして、本作は、そんなフランス人の女流作家マルグリット・デュラスが『愛人 ラマン』に続いて、翌1985年に、71歳で出版した小説『苦悩』を映画化したものらしい。

すると、『苦悩』も、『愛人 ラマン』と同じように、生々しいマルグリッド・デュラスの自叙伝？本作ではまず、そんなフランス人女流作家マルグリッド・デュラスに注目！

私は『失樂園』をはじめとする渡辺淳一の性愛小説(?)が大好きだが、70歳で『愛人 ラマン』を出版したデュラスに比べれば、とてもとても……。さらに、デュラスはせっかく夫が帰ってきたにもかかわらず、終戦後の1946年に離婚し、本作にも登場する愛人のディオニスと結婚して一子をもうけたというからすごい。さらに、66歳になったデュラスは38歳も年下の若い愛人と海辺の別荘での暮らしを始めたそうだから、さらにすごい。いくら渡辺淳一が元気でも、そんなデュラスの元気さには到底及ばないだろう。

## ■□■『苦悩』も自叙伝！邦題とどちらが好き？■□■

本作のパンフレットには、Revueとして①小沼純一の「マルグリッド・デュラス、その作品と人生と、そして愛と」、②村上香住子の「デュラスとヤン・アンドレア」、③小柳帝の「デュラス、あらゆる「待機」という苦悩」がある。これらは、マルグリッド・デュラスの文学を三者三様に分析し、本作の見所を抽出しているので、イントロダクションの解説と共に必読。

しかして、上記③によれば、『苦悩』は五篇のテキストから成り、さらにその五篇はIとIIに分かれるが、この映画はI全体を構成する同名の「苦悩」と、IIの最初に置かれた「ムッシュウX 仮称ピエール・ラビエ」を、時間の流れに沿って再構成したもの、らしい。また、「苦悩」は第二次世界大戦中のドイツ占領間のパリで、デュラスの最初の夫ロベール・アンテルムがレジスタンス運動に加担したかどで逮捕され、収容所に送られてから帰還するまでの、まさにデュラスにとっての「苦悩」の日々を綴った当時の日記をもとにしている(アンテルムの方の視点で書かれたのが『人類』である)らしい。なるほど、なるほど。

もともと、原題の『苦悩』と本作の邦題とされた『あなたはまだ帰ってこない』とは、ニュアンスがかなり違うようだが、あなたはどちらが好き？本作の作り方を観る限り、邦題も『苦悩』にした方が良かったのでは……？

## ■□■夫以外にも男が？そんな女の“苦悩”はより複雑に！■□■

寺島しのぶが2010年のベルリン国際映画祭で最優秀女優賞(銀熊賞)を受賞した、若松孝二監督の『キャタピラー』(10年)は、四肢を失い言葉を失って故郷に戻った軍神サマとそれを支え続ける銃後の妻の生きザマを鋭く描く問題作だったが、そこでは出征した兵士を妻が待つのは当然で、その間に妻が別の男と“いちやつく”ことなどありえないとされていた(『シネマ25』215頁)。

ところが、本作を観ていると、共にナチスドイツへのレジスタンス活動をしていた夫のアンテルム(エマニュエル・ブルデュエ)が、ある日ゲシュタポに連れ去られた直後から、マルグリッド(メラニー・ティエリー)の苦悩が始まるが、マルグリッドの近くには常に

愛人のディオニス（バンジャマン・ビオレ）がいるからアレレ……。さらに、夫を逮捕したというゲシュタポのラビエ（ブノワ・マジメル）が、一方ではマルグリッドの作家としての尊敬の念を隠そうとせず、戦争が終わったら、ドイツに芸術書を扱う本屋を開くのが夢だと語り、他方で、アンテルムの情報を小出しにしながらマルグリッドにちょっかいを出してくる風景が描かれる。そして、マルグリッドがやむを得ず（？）それに付き合っていると、いつの間にか……？

ああ、やっぱりあの当時、徹底的に軍国主義教育をたたき込まれた日本人と、ナチスドイツに占領されてはいるものの、一方ではビシー（傀儡）政権を持ち、他方ではドゴールの亡命政権を持ってレジスタンス活動をしているフランス人民とは全然違うことを痛感！さすが、人権の国フランス！？さすが自由の国フランス！？

## ■魅力的な女優だが、モノローグの多様は如何なもの！■

当時、現役の女子大生だったか岡村孝子と加藤晴子のデュオ「あみん」の1982年のデビュー・シングル曲で大ヒットしたのが「待つわ」だった。そこでは、『キヤタピラー』と同じように（？）、いかにも日本的に、ひたすら「待つ」女心が歌われていた。しかし、自らもレジスタンス活動をしているマルグリッドは、連れ去られた夫アンテルムのことを“苦悶”しつつ、愛人のディオニスとの距離感を保ち、また謎の男ラビエとの“逢瀬”を心待ちにしているようだから、そんなフランス人の女心は私にはサッパリわからない。それを補ってくれるのが本作で多用されるマルグリッドのモノローグだが、これは如何なもの？マルグリッドを演じるメラニー・ティエリーは個性的な魅力に溢れているが、このモノローグの多用によるマルグリッドの心理の説明とその押しつけ（？）は、せっかくの本作の面白さを台無しにしてしまうのでは？

ある日、ナチスの関係者が集まる高級カフェでテーブルを挟んで座ったラビエとマルグリッドの2人は、ワインを飲み交わしながらアンテルムに関する情報を語り、さらには連合軍が優位になっている戦況まで語っていたが、この雰囲気は何ともいえず微妙なものだ。ちなみに、第91回アカデミー賞作品賞は『グリーンブック』（18年）が受賞したが、私が「今年のベスト10の本1本に入ることまちがいなしの超お薦め作だ。」と書いたのが、オランダのポール・バーホーベン監督の『ブラックブック』（06年）（『シネマ14』140頁）。これは、オランダのレジスタンスを描いた映画だが、そのラストでは、ナチスドイツに協力した者（女）が戦犯として裁かれるシーンがショッキングな形で描かれていた。そうすると、本作のこんなシーンがフランスのレジスタンスに目撃されていれば、後日マルグリッドは「ナチスドイツの協力者！」として処刑されてしまうのでは？空襲警報が鳴る中、客は秩序を保ちながら防空壕に避難したが、残った店の中でラビエからある場所に誘われたマルグリッドはどうするの？また、カーテンで遮断された店の中で、2人の抱擁とキスはどこまで進むの？さらに、空襲警報が鳴る前にドイツ人たちに交じって楽しそうに2人

がダンスする姿を苦々しそうに見ていたマルグリッドの愛人ディオニスの心境は？

なるほど、逮捕された夫を待つ妻マルグリッドの“苦悩”もかなりのものだろうが、そんな“苦悩”と付き合いながら自分の居場所や彼女との距離感を確認しなければならないディオニスもラビエも大変だ。しかし、繰り返せば、それらを表現するについて、マルグリッドのモノローグを多用する手法は如何なもの・・・？

## ■□■パリ解放！情勢は逆転！夫の安否は？■□■

本作のスタートは1944年6月。この時期、フランスはナチス占領下に置かれていたが、「史上最大の作戦」として名高い連合軍によるノルマンディへの上陸作戦の実施は同年6月6日だから、既にナチスドイツの敗色は決定的になっていた。そのため、夫を連行された妻マルグリッドと夫を連行したゲシュタポのラビエとの“力関係”が微妙なものになっていたが、マルグリッドやディオニスによる懸命な情報収集活動にもかかわらず、アンテルムの状況はようとして知れなかった。また、パリ市内でナチスの旗色が悪くなっていく中、あのカフェのダンス以降、ラビエからの連絡も途絶えてしまったから、ひょっとしてラビエは職務怠慢（公私混同？）がバレて左遷されてしまったのかも・・・？そんな中で、『史上最大の作戦』（62年）をはじめとするいろいろな映画で観た1944年8月の“パリ解放”になるから、マルグリッドは大喜びだ。また、その頃にはナチスドイツによって囚人とされた人々が次々とパリに戻り始めていたから、きっとアンテルムも近いうちに・・・。

他方、パリ解放に伴って、ナチスドイツの残虐行為の数々が明らかにされてくる中、捕虜の帰りを待ち続けていたマルグリッドのような女たちには、不安と恐怖が広がっていた。娘の帰還をずっと待っているが、パリ解放の後に、娘が捕らえられた翌日には虐殺されていたことを知らされた母親の悲しみを知ると、マルグリッドの不安が広がっていったのは当然だ。今なお、アンテルムの情報が全く入ってこないのは、なぜ？やはり、どこかで人知れず殺されてしまったの・・・？マルグリッドは毎日のように開かないドアを見つめ、ドアが開くことを悪夢ともつかない想いで、ただ見つめるだけだったが・・・。

## ■□■夫は生きている！夫は帰ってくる！しかし・・・■□■

そんな状況下では、本作の邦題『あなたはまだ帰ってこない』が、いかにもピッタリだ。しかし、ある日ディオニスの情報網から「アンテルムは生きている！」との情報が。それを聞いたマルグリッドは歓喜の涙を流しながら大喜び！誰でもそう思うのが当然だが、実は原作ではそうではないし、本作もそういう展開にならないから、それに注目！もつとも、ディオニスからマルグリッドに伝えられた情報は、「アンテルムは生きている」に続いて「但し、アンテルムは大病で、命も危うい」というものだったから、これを聞いたマルグリッドの反応は？

ちなみに、原作者のマルグリッド・デュラスは1914年生まれだから、パリ解放の時

は30歳。心待ちにしていた夫アンテルムは現実にパリに戻り、命もとりとめたそうだから、すべてが万々歳・・・？のはずだが、現実にはデュラスは1946年にアンテルムと離婚し、1947年にはディオニスの子供を出産したというから恐れ入る。したがって、本作では「夫が生きている！」「しかし、危篤状態だ」と知らされた時のマルグリッドの気持ちにしっかり密着したい。しかして、その点についてのマルグリッドの演技は・・・？  
また、マルグリッドのモノローグは・・・？

ナチスドイツを率いたヒトラーの自殺は、『ヒトラー最後の12日間』(04年)、『シネマ8』292頁)に描かれていたように、1945年4月30日だから、日本人的感覚からすれば、その頃マルグリッドは、戻ってきたアンテルムと共に心安んじて暮らしていたとき、となるところだが、何の何の！何とマルグリッドは1980年には38歳も年下の青年ヤン・アンドレアと恋人関係になり、そこからさらに1984年の『愛人 ラマン』の発表に至るわけだから、すごい。そんなフランスの女流作家マルグリッド・デュラスが1996年3月3日に死去するまでの人生を俯瞰しながら、その若き日の一部としての本作をしっかり鑑賞したい。そう考えると、なおさら『あなたはまだ帰ってこない』という邦題は、少し単純すぎるのでは・・・？

2019(平成31)年3月20日記